

ハングリー精神

昔はみんな貧乏でした。特にわが家は貧乏でした。中学3年生までわが家にはテレビも洗濯機も冷蔵庫も掃除機もありませんでした。すでに、友だちの家にはこれらの電気製品が急激な速さで普及していました。当時はテレビが入っている家の屋根にアンテナが誇らしげに立ちました。屋根の上のアンテナは「おらっちにはテレビがあるぞお！」と近所界隈に宣言しているようなものでした。わが家の屋根はいつまでも普通の屋根でした。学校でも時々、テレビ番組が話題になることがありました。「力道山対ブラッシャー」「デストロイヤーの四の字固め」「とんま天狗」「隠密剣士」「栃錦対若乃花」…全くわかりません。

先生さえもが「あたりまえだのクラッカー！」とかいうギャグを使って、テレビのある家の子だけが笑いました。

やがて、わが家にも待望のテレビが入りました。中学3年生でした。ところが、このころになるとテレビはカラーの時代でした。わが家はくっきりとした白黒です。新聞のテレビ番組欄にはカラー放送は番組の頭に「カラー」と書いてありました。進歩は早いもので、みるみるうちに番組欄のほとんどがカラーになってしまいました。私は大の力道山ファンでした。ジャイアント馬場なんかはまだ力道山の前座試合にも出られなかった時代です。リングアナウンサーが「ブラッシャーにかみつかれた力道山の額から真っ赤な血が流れています。」と叫んでいますが、わが家のテレビは真っ黒な血でした。

白黒のテレビでも力道山が流す血の色を想像するのは容易です。しかし、力道山のはいているももしきのようなタイツもわが家のテレビでは黒に見えます。これは困りました。このタイツももしかしたら真っ赤なのではないだろうか。そう思うとそのように見えてきます。力道山のタイツは赤！、そんなイメージがしっかりできあがった時に友だちの家のカラーテレビで力道山を見ました。何のことはない、わが家のテレビと同じ黒のタイツでした。

当時のスポーツ選手はみんな子どものころは貧乏でした。貧乏で培われた鋼のような精神が一流のスポーツ選手を育んだのではないのでしょうか。もちろん、スポーツ選手だけではありません。その道に秀でた人たちの多くは貧しさを肥やしとしました。

わが家も「貧しさ」は人一倍ありましたが、「強さ」や「忍耐」への転換が十分ではなかったようで、無い物ねだりの軟弱な人間になってしまいました。ごめんなさい。

ところで、鋼の精神と肉体を持つ、初代若乃花が引退して相撲解説をする機会がありました。外国人力士が徐々に頭角を現す時代でした。特に韓国出身の力士を讃えて力強くこう言いました。

「韓国の力士にはハングル精神がある。」

「あってるけど、ちょっと変！」

